

《認定者数は 5735 件、死亡認定 420 件》コロナワクチン後遺症の調査結果を京大名誉教授が発表

2024 年 3 月 19 日朝日新聞



京都大学名誉教授の福島雅典氏が新型コロナワクチン後遺症の調査結果についての論考を、月刊「文藝春秋」4月号で発表しました。その内容について、早くも多くの読者のみなさんから反響が寄せられています。16 ページにわたる論考の一部を特別に公開します。(取材・構成 秋山千佳・ジャーナリスト)

少なく見積もっても万単位の人が苦しんでいる事実

従来の医学の常識からすると信じがたいことが起きている——。これが、新型コロナウィルスワクチン接種後の健康被害を調べてきた私の偽らざる思いです。

一例を挙げましょう。

ある 28 歳の会社員男性は、基礎疾患がなく、直近の健康診断の総合判定は A でした。ところが 2021 年 11 月、ファイザー社製ワクチンを 2 回目接種した 5 日後に死亡。亡くなる前夜は 37.5 度の熱で午後 9 時過ぎに就寝し、翌日昼頃になっても起きてこない男性に妻が声をかけに行った時には、既に体が硬直して冷たくなっていたのです。

死因は、心筋融解（横紋筋融解症）による急性心不全でした。つまり、若くて健康だったはずの男性の心臓が溶けてしまっていたのです。

担当した法医解剖医は「心臓を取り出そうとしたらフニャフニャだったので仰天した」と話していました。横紋筋融解症とは筋細胞が溶けてしまう病気ですが、心臓に出現したケースは私もかつて聞いたことはありません。

コロナワクチンの影響に関しては、命を落とさないまでも後遺症に悩まされている人は数多く、その影響はあらゆる体内組織に及んでいることがわかってきました。また、接種によって感染リスクがかえって高まる可能性も大いに考えられるデータが出ています。

厚労省は、医療機関からの副反応疑い報告の件数を公表しています。死亡者 2122 件、重篤者 8750 件、副反応疑い 3 万 6556 件です（2023 年 7 月 30 日時点）。もっとも、診断基準がなく医師がワクチンの影響を疑わない場合もありますし、同じ厚労省の集計でも件数の異なる資料があるため、正確な数とは言えません。いずれにせよこれは氷山の一角だと私は捉えています。

ただ、少なく見積もっても万単位の人が苦しむことになったことは、厳然たる事実です。

しかし、ワクチンを推奨してきた医師会や学者の多くは、いまだに事実を直視しません。厚労省も、不都合な事実をごまかしてきました。

私は 2023 年 6 月、「ワクチン問題研究会」という学術団体を有志の医師らと立ち上げました。そして、ワクチン接種後の健康被害=「ワクチン接種後症候群」の研究に取り組むべ



日本国内においてコロナワクチン接種後、急に発症するなど、
医学学会で報告や検討された疾患 (2021年12月～2023年11月)

心臓の病気	心筋炎(複数)、心膜炎(複数)、完全房室ブロック、心筋梗塞、Brugada症候群、心房細動、致死性不整脈、冠動脈瘤、Valsalva洞動脈瘤、心タンポナーデ
腎臓の病気	肉眼的血尿(複数)、腎炎(複数)、IgA腎症(多数)、ネフローゼ症候群(複数)、ループス腎炎(複数)、腎硬化症、多発血管炎、間質性腎炎(複数)
甲状腺の病気	亜急性甲状腺炎(複数)、甲状腺クリーゼ(複数)、バセドウ病(多数)、破壊性甲状腺炎(複数)、慢性甲状腺炎
糖尿病	1型糖尿病発症(複数)、糖尿病性ケトアシドーシス(複数)
肝臓の病気	自己免疫性肝炎(複数)、急性B型肝炎、香腸型急性肝不全、薬物性肝障害
皮膚の病気	帯状疱疹(多数)、円形脱毛症増悪(複数)、皮膚筋炎(複数)、好中球性紅斑、全身性膿疱性乾癬(複数)、遅延性種痘性紅斑、膿疱性乾癬、扁平苔癬、好酸球性持重結核、全身性強皮症、急性汎発性発疹性膿疱症
目の病気	ぶどう膜炎(複数)、視神経炎、硝子体出血、多発消失性白点症候群(複数)、網膜分枝静脈閉塞症(複数)、網膜血管閉塞、網膜外層障害(複数)、ヘルペス角膜炎、Valsalva網膜症、AMN、網膜血管炎、網膜色素上皮炎、眼球運動障害(複数)、網脈絡膜血管障害(複数)、視神経症、多量性脈絡膜炎、強膜炎
血液の病気	発作性血色素尿症(複数)、血小板減少性紫斑病(複数)、血球貪食症候群(複数)、後天性血友病、自己免疫性血液凝固異常症、血小板減少を伴う血栓症、自己免疫性後天性凝固因子欠乏症、血小板減少、重症自己免疫性第XIII因子欠乏症、重症溶血性貧血、モノクローナル免疫リンパ増殖性疾患、発作性寒冷ヘモグロビン尿症、von Willebrand症候群
血管の病気	血管炎(複数)、IgA血管炎(複数)、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(複数)、ANCA関連疾患(多数)、分節性動脈中膜溶解症、高安動脈炎、大動脈炎症候群、下肢広範深部静脈血栓症、血管炎による多臓器出血、解離性動脈瘤破裂、静脈洞血栓症、硬膜動脈脈瘤(複数)、皮膚血管炎
神経の病気	顔面神経麻痺(複数)、ギラン・バレー症候群(複数)、脱髄性多発神経炎(複数)、脊髄炎(複数)、痛覚変調性疼痛、一過性全健忘、周期性四肢麻痺、悪性症候群、脊髄機能障害、解離性神経症状、感音難聴、脱髄性ニューロパシー、脳炎、てんかん発作、前骨間神経麻痺、後骨間神経麻痺
全身の病気	サルコイドーシス(複数)、全身エリテマトーデス(複数)、多発性筋炎(複数)、多臓器出血、アナフィラキシー、TAFRO症候群、小児多系統炎症性症候群、IgG4関連疾患(複数)、成人発症Sjögren病
脳の病気	下垂体炎(複数)、ACTH単独欠損症(複数)、帯状疱疹ウイルス脳炎(複数)、くも膜下出血(複数)、脳梗塞(小児)、脳動脈瘤破裂、脳炎、脳出血、下垂体卒中、中枢性尿崩症、脳梁病変、自己免疫脳炎・脳症、脳脊髄炎、下垂体機能低下症
肺の病気	胸膜炎、肺泡障害、肺萎縮症、呼吸窮迫症候群、肺出血、肺萎縮症、血栓塞栓性肺高血圧症、間質性肺炎、重症気管支喘息の増悪
副腎の病気	副腎不全(複数)、副腎機能低下症(複数)、副腎クリーゼ
リンパ節 リンパ腫	反応性リンパ節腫大、TAFRO症候群、悪性リンパ腫
消化管の病気	潰瘍性大腸炎(複数)、重症腸炎
他	筋炎(複数)、リウマチ(多数)、 3/4 炎性関節炎(複数)、多発筋痛症、壊死性ミオパシー、RS3PE症候群、群発頭痛、横紋筋融解症、無月経、低Na血症

く、四つの目的を掲げました。世界中の論文のデータベース化、症例データベースの構築、検査方法の開発、治療方法の確立です。

“反ワク” 批判は科学の放棄だ

これらの研究から、ワクチン接種後症候群の知られざる実態が判明してきました。問題解決に向けて、多くの人と共有できればと思います。

私のことを“反ワク”と呼ぶ人がいるのは承知していますが、バカバカしい話です。科学者であればワクチンへの賛否という主観を交えず、あるがままに事象を見るべきです。事実に目を瞑って「ワクチンは安全なんだ」と妄信するのはいわば“ワクチン信仰”でしかありません。体内で起きる現象は、医学の対象となるもので、信じるか信じないかという宗教論争にするのは間違っているのではないのでしょうか。

福島氏は1948年生まれ。73年に名古屋大学医学部を卒業し、78年愛知県がんセンター・内科診療科医長。1994年には世界で最も使われる診断・治療マニュアル「MSD マニュアル（旧メルクマニュアル）」を日本で初めて翻訳・監修した。2000年に京都大学大学院医学研究科教授に就任し、医薬品の適正使用や副作用被害防止などを扱う日本初の「薬剤疫学」講座を立ち上げるなどした。その後は、全国の大学の新規医療の研究開発を支援するセンターとして文科省と神戸市が創設した「医療イノベーション推進センター（TRI）」センター長などを歴任してきた。

ワクチンによる副作用の上位10疾患は？

まず、ワクチン接種後症候群がどれほど多岐にわたるのか、お示ししましょう。

上の表は、ワクチン接種後、急に発症するなどした疾患として、2021年12月から2023年11月までの2年間に、国内の医学学会で報告・検討された疾患の一覧です（開催学会数134、演題数447）。計201疾患に上り、あらゆる体内組織で発症しています。

これらの疾患名を元に、さらに論文検索エンジンを用いて、世界中のワクチン問題文献データベースを作成しました。

その結果、計3071報の副作用報告を集めることができました。なお、日本の学会では当該期間に報告がありませんでしたが、国外では精神疾患も多数報告されていました。

世界中の論文から見えてくるこのワクチンの副作用は、パターンが決まっておらず、全身に起こる、しかも複数の疾患が同時に起こることもあるというものでした。こんな副作用の出方は前例がない、というのが医師としての率直な感想です。私の専門のがんで言うと、抗がん剤は副作用の嵐ではありますが、そのパターンは決まっているからです。

ワクチンによる副作用の上位10疾患は、(1) 血小板減少 (557)、(2) 頭痛 (455)、(3) 心筋炎 (344)、(4) 血小板減少を伴う血栓症 (328)、(5) 深部静脈血栓症 (241)、(6) ギラン・バレー症候群 (143)、(6) 静脈洞血栓症 (143)、(8) アナフィラキシー (140)、(9) リンパ節腫大 (132)、(10) 血管炎 (129) でした（後ろのカッコ内の数字は世界中の論文での報告数）。

血栓症とつく疾患が三つ含まれているなど血管系障害が目立ちます。

これが比較的初期のワクチン接種後症候群の傾向です。接種から長期間経過して判明する新規症例は含まれていないことに注意が必要です。

次に、ワクチン接種による死亡状況を見ていきます。

厚生省が公表しているデータを用いて、ファイザー社製ワクチン接種後1カ月までの日

数別死亡者数の棒グラフを作成しました。すると、接種開始直後（2021年5月26日～7月21日）もその後（同年8月4日～2022年3月18日）も判で押したように、接種後2日目をピークとして5日目から減衰する特徴的なパターンのグラフになりました。

同じく厚労省のデータを元に、ファイザー社製ワクチン接種後の死因を円グラフにしました。するとやはり、接種開始から数カ月間の時期でも、翌年までのデータでも、死因の順序も割合もほぼ一致しました。

死因上位は、(1) 血管系障害、(2) 心臓障害、(3) 状態悪化、(4) 肺炎、(5) その他です。

血管系障害と心臓障害だけで半数近くを占めます。

私たちの研究会は、国に対する要請も行ってきました。

1月には、武見敬三厚労相に対して「新型コロナワクチン接種による健康被害者の速やかな救済に関する要望書」を提出。ワクチン接種後死亡者や健康被害者の全例調査、全被害者の救済・補償や適切な医療の提供などを求めました。

これらは無理難題ではなく、既存の制度で対応可能なものです。

日本では、新規メカニズムの医薬品や、稀にでも重篤な副作用が懸念される医薬品に対し全例調査を行う制度（医療用医薬品の全例調査方式による使用成績調査）があります。

また、ワクチンによる健康被害に対しては、「予防接種健康被害救済制度」に基づいて救済を行う仕組みがあります。

健康被害の認定者数は 5735 件、死亡認定 420 件

新型コロナワクチンによる健康被害の認定者数は、2021年8月から23年12月27日までに5735件（死亡認定420件）です。現行の救済制度が開始された1977年2月から2021年12月までに、新型コロナワクチンを除く全ワクチンの被害認定者数は、3522件（死亡認定151件）。新型コロナワクチンひとつで、過去45年間の国内すべてのワクチン被害認定件数を既に超えているのです。

この被害規模の大きさゆえ、救済制度に申請しても、審査に時間がかかっています。冒頭で触れた「心臓が溶けた」男性のご遺族も、申請から1年近く経っても審査が進まず、私がまとめた意見書を追加提出し、さらに1年後、申請からは2年後の三回忌ようやく認定されました。

武見大臣は記者会見で私たちの要望書に触れ、救済制度の審査の迅速化を進めた結果、従来の4倍の審査件数を処理できるようになったと述べました。スピードアップとともに適切な救済・補償と、医療の提供を進めていただければと願います。

◆本記事の全文は、「文藝春秋」4月号および「文藝春秋 電子版」に掲載されています（「コロナワクチン後遺症の真実」）。

大反響につき開催決定！ 「文藝春秋 電子版」は4月3日（水）19時より、京都大学名誉教授の福島雅典さんとジャーナリストの秋山千佳さんによるオンライン番組を生配信します（<https://bunshun.jp/bungeishunju/articles/h7847>）。「福島先生にこの問題について初歩的などころからお聞きしたい」という多くのリクエストに応えるこの番組。読者のみなさんからの事前質問を受け付けています。こちらのメールアドレスまでぜひお寄せください。質問の宛先：mbunshun@bunshun.co.jp

メールの件名に「福島先生への質問」と明記してください。